

た。王臺生活三十五年、語り物九十三番を數ふ。墓碑所在左に、

天王寺西門、納骨堂の背後

一、竹本播磨少掾浮圖

同 所

一、文正翁曲帶塚（舞臺用腹帶を埋む）

千日前法善寺（現今不明）

一、文正翁句碑（竹田出雲の讚句あり）

伏見中書嶋建久寺（現今不明）

一、文正翁扇塚（舞臺用拍子扇を收む）

生玉口繩坂東天瑞寺（小生發見）

一、不聞院乾外孤雲居士の墓（不聞院云々は播磨少掾の法名）

大 近 松 の 死

大阪大火に絡む因縁話

享保九年一月十五日、竹本座へ上演した近松門左衛門の傑作「關八州繫馬」は、堂々たる長編物で、内容も複雑變化を極め、而かも舞臺構造の大きな面白い芝居であつた爲に、名人政太夫の口からひとたびこれが世上に傳はると、それはそれは大變な評判となつた。さうして二月一ばいこれを打續けるほどで、まづそれまでは無事であつた。評判と市中の人氣が騰るにつれて、

誰れいふとなく、不思議な風説が立てられて、だんだんにそれが擴まつて行つた。その風説といふのは、近々この大阪市中に大火が起る、あんな芝居を出されては皆が迷惑をする、とかういふ噂であつたが、無論そんな迷信のやうな取り止めもない噂には座方だつて、好人氣に酔つてゐる時ではあり、誰れ一人氣にかけてゐるものとはなかつたのである。併しその噂の起りといふのは、まんざら心當りが無い譯ではなく、この淨瑠璃の第四段目、多田の御所、源頼信の御臺所、伊豫の内侍の寢所の場にこんなところがある。

内侍は毒婦小蝶の死に祟られて病臥してゐる。この寢所に詰める頼信四天王の女房達は、何とかして怨靈を攘ひ除け、内侍の鬱氣を散ぜんものと、よりより工夫を廻らしてゐる。中でも小幡の才覺で、今宵は恰ど七月十六日の精靈會、京の東山の大文字焼の行事を、この庭前に寫して見てはとの妙案が立てられた。東山の大文字は、もともと魂祭の聖靈を送る送り火だから、娑婆に迷ふ妄執を攘ひ除ければ、内侍の御惱みも除くことが出来ようといふものである。皆は勿論同意をした、庭の大築山を京の如意嶽に見立て、多くの柴を積み重ねて大の字劃を作り、四方から火をかけると、さながら京の大文字を見る光景である。やがては燃えさかる猛火の中から小蝶の亡靈が現はれ、内侍を對手にして、謠曲土蜘蛛を取り入れた景事になる。

此時である。からくりや、あやつりを應用し、舞臺裝置にも思ひ入れ凝つたところを見せてウンと見物を喜ばせた。ところが喜んでゐた筈の見物の中から、舞臺の「大」の字が盛んに燃えるのを見て、大阪の「大」の字が焼かれては堪らぬ、きつと近々、大阪大火の前兆だと、かういふところから噂は大きくなつて來たのである。流言蜚語もまんざら馬鹿には出來ぬもので、不思議とも奇妙とも、この興行が終つてまだ一月とは經たない同年三月二十一日午の刻（正午）堀江橋通三丁目（現在西區南堀江上通三丁目）金屋治兵衛の祖母妙智の隠居所から火を發して、焼けたも焼けた大阪全市の九分五厘まで、黒焦げになつてしまつた。當時の記録によると、西南の大風に乗じて堀江から新町へ阿波座京町堀江戸堀を焼き拂ひ、船場に入り座摩神社から津村別院を嘗め、火は次第に北へ延びて中の嶋から曾根崎天満へ及び、たうとう長柄にまで飛んだ。夜になつて風位は西に轉じ、今度は東大阪へ飛び上町へ移つて、東西兩町奉行所、その他の官署を倒し、一方東天満から與力同心屋敷を襲ひ、備前嶋相生町に及んだ。翌二十二日曉方には、風は轉じて東北となり、各所に散在してゐる火焰は一齊に南西へと這ひより、嶋の内より道頓堀に延焼し、申の刻（午後四時）に至つてやうやくその猛威を收めた。凡そ三十時間に亘る大火は、焼失町四百八丁、家一萬七千七百六十五軒、市外三百六十二軒、竈數六萬二百九

十二、藏屋敷三十二ヶ所、死者二百九十三人、その惨澹たる光景は、さながら先年の關東大震災の有様であつたらう。



像の門衛左門松近

した悪影響は實に言語に絶したものがあつて、自然人々の口からは、竹本座の芝居の豫言が的中したので、『それ見たことか』といふ風にまた云ひ囃した。

さうして此年十一月に、この因縁にからまれた『關八州繫馬』の作者近松は、七十二歳を一

一時の流言がたうとう事實となつて、

こんな怖ろしい結果を見ることになつたのである。その時、道頓堀では、神山小四郎座と松嶋岩太夫座を除く外は全部焼失、津川萬太夫座、出羽座、さうしてわが竹本座は不分明であるが、その他關係者は悉く罹災民となり更に市中の罹災光景は、かういふ場合には習はしの窮民と暴徒の輩出となり、政治經濟の上に及ぼ

期として大往生を遂げてゐる。無論その死は病死であるが、恭謙細心な近松の人格を思ひ、この不思議の大火を思ひ合はせる時、近松の死を早からしめる上に何等かの影響がまんざら無かつたとは云へまいと思ふのである。己が作から流布された蜚語が、大阪全市にかやうな不祥事を起して、作者近松たる者（勿論作者も罹災民の一人であつたが）眼前その光景を眺めさせられては、その憂慮傷心は甚だ深刻であつたと想像される。のみならず、その頃の近松は絶えず病床に親しんでゐて、一年に三四種或は五種の作品を年々發表してゐる近松が、この終焉の前の享保八年は殆ど執筆を絶つてゐて、翌九年に漸やく此作を書いたほどだから、さなきだに病弱であつた身に、かういふ大きな心痛の種を蒔かれては、病態に大打撃を受けたは勿論、その死を早めた原因になつたに違ひない。さうして「關八州繫馬」といふ名作は遂に近松の絶筆となり、時代物中第一位の傑出篇でありながら「火を呼ぶ」といふ因縁に祟られて、たうとう劇壇から封じ込められるといふ飛んだ厄難に出逢つてしまつた。